

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月20日現在

機関番号：30117

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21650187

研究課題名（和文）介護家族と介護職のウェルビーイングに関する定性的・定量的両手法による融合的研究

研究課題名（英文）Studies on well-being of nursing families and care workers:
A comprehensive approach using both qualitative and quantitative methods

研究代表者

風間 雅江 (KAZANA MASAE)

北翔大学・人間福祉学部・教授

研究者番号：60337095

研究成果の概要（和文）：介護にあたる家族と専門職の主観的ウェルビーイング（人生満足感、幸福感等）の通時的変化や関与要因を、インタビュー調査、質問紙調査、患者会への参与観察および支援の実践研究を通して検討した。介護家族と介護職とで異なる、長期経過に伴うウェルビーイングの変化の様相が明らかにされた。介護職への質問紙調査では用いた種々の心理変数のうち主観的幸福感に最も影響を及ぼしていたのは精神的回復力（レジリエンス）であった。

研究成果の概要（英文）：Happiness in families of professionals involved in care work, as well as changes over time and related factors concerning subjective well-being, such as the feeling of satisfaction with life were examined through interviews, questionnaires, participant observation at the peer support conferences, and practical studies of support. The results indicated that the conditions of changes in well-being over the long time course were different between the families and care workers. A questionnaire survey conducted with care workers indicated that among the various psychological variables that were investigated, the mental recuperative power, or resilience, most strongly affected the subjective feeling of happiness.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	0	700,000
2010年度	700,000	0	700,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	150,000	2,050,000

研究分野：心理学

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：ポジティブ心理学、介護、主観的ウェルビーイング、レジリエンス、質的研究、ナラティブ、アウトリーチ、介護者支援

1. 研究開始当初の背景

（1）厚生労働省による統計予測では、現代日本の高齢社会において、認知症や高次脳機能障害などの要介護高齢者は急速に増加し2025年には520万人にも膨れあがるとされているが、要介護者に対する多様な介護サー

ビスが展開される一方で、介護にあたる家族の負担は依然として大きく、介護福祉士等の専門職についても労働条件をはじめさまざまな問題が指摘されている。介護労働実態調査では、介護職を働きがいのある仕事という理由で選択した人が多いにもかかわらず、他

の職種に比べ平均勤続年数が短いことが示されている(介護労働安定センター, 2009)。

要介護者の QOL には様々な要因が複雑に絡み合っており影響を及ぼすが、そうした要因の一つに、直接接頻度が高い介護者のウェルビーイング (well-being) が含まれると考えられる。介護を実践する側の人間が、いかに介護体験を自己成長に繋ぐものとして認知し、ひいては自分の人生全体をポジティブに評価し、他者および自己に対して肯定的認識をもった上で介護にあたることができるかという点が、介護者と要介護者の双方にとって極めて重要であると考えられる。介護家族と介護職を対象とし、彼らの生きがい感や幸福感といった主観的ウェルビーイングの様相を明らかにすることによって、高齢社会における国民の生活基盤を支えるうえで重要な役割を担う介護者を支援するための具体的方法を知る手がかりが得られると期待された。

(2) 社会心理学の領域では、ウェルビーイングについての先行研究として、社会的脈絡を勘案しつつ、個人のパーソナリティ特性および認知・感情を変数とした定量的検討や、トラウマティック体験後の状態からの成長に関する介入研究など多様な研究が行われている。しかし、介護者のウェルビーイングに焦点をあてた研究は十分になされていない。研究代表者の風間は高次脳機能障害者家族への半構造化面接で得た語りデータに対してグラウンデッドセオリーを適用した質的研究により、長期間の介護経験とライフイベントへの遭遇により錯綜するネガティブ感情とポジティブ感情の揺らぎの中で介護者が過去の過酷な体験を再解釈し絶望から希望へと転換したうえで自己成長を体感した事例を報告し(風間, 2007)、さらに、介護者・要介護者の関係性について長期間を経てポジティブな関係に変容していくプロセスを示し(中村・風間, 2008)、介護家族の心理的理解と支援の重要性を指摘した。これらの知見を通して、介護家族のウェルビーイングについて、より構造的、包括的に検討し、家族ごとの個別性と介護実践をめぐる普遍性を明らかにする必要があるとみなされた。また、介護家族のみならず、介護職についても同様の検討を行うことにより、将来の超高齢社会にむけて、福祉の現場を担う専門職を支えるための有効な知見が得られると考えられた。

(3) 介護をめぐる心理的諸問題について、学際的研究として介護者支援の推進に繋げることをめざした試みはあまりない。共同研究者の本間美幸・八巻は介護福祉学の観点から介護福祉士の専門性意識等について現職者対象の大規模な調査を行い、専門性向上の必要性を感じながらも現時点で自分は不十

分と認識し葛藤している専門職が多いことを示した(本間・八巻・佐藤, 2008)。共同研究者の本間真理は、リハビリテーション医学の臨床にあたりながら、慢性疼痛の患者グループによる長期的支援をはじめ、同病の性格特性の年齢層別特徴の把握およびそれに応じた臨床の提言、認知行動療法等の心身医学的アプローチの実践で多くの知見を報告している(本間他, 1993, 1994, 1995, 2007; 本間, 2003, 他)。本研究は、心理学、介護福祉学、医学の領域で現場での豊かな実践経験をもつ研究者が連携し、介護のもつ特殊性や、要介護者および介護家族の疾患や生活背景等を把握したうえで、介護者のウェルビーイングの特性と変容および要因を多面的に検討するものであり、その結果から現場のニーズに応え得る心理的支援を知る手がかりが得られるものと予測された。

2. 研究の目的

(1) 介護家族および介護専門職のウェルビーイングの特性および、それにかかわる要因について包括的に解明することを目的とする。ウェルビーイングをめぐる先行研究を参考にして、その概念を整理したうえで、主観的ウェルビーイング (subjective well-being) に焦点をあて、ポジティブ心理学の観点から、その感情的側面、認知的側面について検討する。

① 介護家族および介護専門職への半構造化面接によって得たナラティブに対して質的分析を行い、個々の事例におけるウェルビーイングにかかわる要因の共通性と個別性を明らかにする。

② 種々の心理尺度を組み合わせた質問紙調査によって収集した数量データに対して統計的解析を行い、介護者のウェルビーイングに影響を及ぼす内的要因を明らかにする。

(2) 介護家族と介護専門職それぞれについて、長年にわたって介護を実践する経験を積み重ねることによるウェルビーイングの通時的変化のプロセスを明らかにする。

(3) アウトリーチによる実践研究として、介護家族が集う患者・家族会に継続的に参加し、患者や家族からの相談等に対応する支援活動を行い、ウェルビーイング回復のプロセスを知る手がかりを得る。

3. 研究の方法

(1) 介護家族および介護専門職に対する半構造化面接によるインタビュー調査

① 介護家族については、主に高次脳機能障害をもつ夫を介護する 40 歳代から 70 歳代の女性 8 名を対象にインタビュー調査を行った。夫の原因疾患は、脳梗塞、脳腫瘍等の脳疾患であり、その後遺症として失語症、遂行機能障害等の高次脳機能障害および運動障害を

呈する状態にあった。夫の発症後間もない介護年数 2 年弱の 1 名を除くと、介護年数は 4 年から 26 年、平均介護年数は 15.8 年であった。調査対象者に対して、本研究の目的、方法、権利、結果公表、個人情報保護、所属機関の研究倫理委員会の審査を受け承認を得ていること等を説明し、書面にて協力同意を得た。個別に半構造化面接を行い調査対象者の了解のもと IC レコーダに語りを録音した。面接に先立ち、インタビューガイドを作成し、介護生活が始まってから現在に至るまでの経緯等について質問をしたが、語り手に心理的負担がかからないことを優先し、対象者による語りの流れを妨げないようにした。面接は 1 名に対して 2 回面接を実施、その他の対象者は 1 回のみ面接で、面接時間は約 1 時間であった。録音した語りを全て逐語録に書きおこし、いきがいが感や充実感等の変化、およびその高低や維持にかかわる内容についての語りをカテゴリー分類し、時系列にそって整理した。

②介護専門職については、北海道札幌市近郊の特別養護老人ホームあるいは介護老人保健施設に勤務する介護専門職 6 名(男性 1 名、女性 5 名)に対してインタビュー調査を行った。年齢は 28~46 歳(平均 35 歳)、高齢者介護施設での勤続年数は 5 年 6 か月~19 年 10 か月(平均 12 年 4 か月)であった。年齢および勤続年数によって分けると、28~30 歳で勤続年数 5~8 年が 3 名、37~46 歳で勤続年数 16~20 年が 3 名であった。調査対象者に対して、本研究の目的、方法、権利、結果公表、個人情報保護、所属機関の研究倫理委員会の審査を受け承認を得ていること等を説明し、書面にて協力同意を得た。あらかじめ作成したインタビューガイドに従い、個別に半構造化面接を行い調査対象者の了解のもと IC レコーダに語りを録音した。面接は全対象者が 1 回のみで、平均面接時間は約 1 時間であった。録音した語りを全て逐語録に書きおこし、いきがいが感や充実感等の変化、およびその高低や維持にかかわる内容についての語りをカテゴリー分類し、時系列にそって整理した。

(2) 介護専門職に対する質問紙調査

北海道内の高齢者介護施設 20 箇所働く現職介護職 200 名を対象に、主観的ウェルビーイングの実態とそれに関与する要因を定量的に検討するための無記名式質問紙調査を行った。調査項目として、年齢、性別、介護関連資格、年収、雇用形態、勤続年数、夜勤の有無等の属性情報、および心理変数として、主観的幸福感、レジリエンス、個人志向性、社会志向性、バーンアウトをとりあげた。これらについて、客観性妥当性をもって測定し得る心理尺度を用いて質問紙を構成し、協力施設に郵送し、無記名返信封筒にて研究代

表者宛返送を求め、得られたデータを統計的に分析処理し検討した。

(3) 患者・家族会への継続的に参加による参与観察および相談対応等の支援活動実践

①「北海道失語症友の会」への賛助会員および顧問としての継続的参加および相談対応等の支援活動、会員家族へのインタビュー等を行い、ウェルビーイングの特性の変化や QOL 向上、当事者から求められる支援について考察した。

②「慢性痛グループくろばんの会」における過去 11 年間の支援活動の実践記録を整理し、森田療法等の集団療法としての介入アプローチ、ピアグループの集団特性の変化についてのふりかえりを通して、活動の意味づけや課題を再検討した。

4. 研究成果

(1) 介護家族におけるウェルビーイングの特性および関与する要因、通時的変化

①高次脳機能障害者および認知症の介護にあたる家族へのインタビュー調査から得たナラティブに対して、グラウンデッド・セオリー・アプローチによる質的分析を行った結果、ウェルビーイングは、生活への満足等の認知的側面と、幸福感等の感情的側面から整理することができた。介護家族は、発症当初の混乱の時期を経て、介護経験が長くなるにつれ、介護負担や将来の展望を楽観的に捉えようとし、「今ここ」での満足を見いだし、家族の受障を自己成長の契機とみなす等、過去の苦難をポジティブな経験として認知するように変化していた。

要介護者は全て、突然の脳疾患発症により急性期医療を受けた後、高次脳機能障害等に対して通院、転院等による慢性期リハビリテーション医療を経て家庭復帰し、最終的に職場復帰を断念せざるを得なかった。介護家族は発症当初病室に付き添い退院後家庭での介護が始まり、体調を崩した事例、就労し始めた事例、ボランティア活動を始め事例がほぼ同数であった。

介護者の語りのなかで主観的ウェルビーイングに関連する表現は極めて多岐にわたった。全ての事例に共通して介護初期はネガティブなカテゴリーが主であったが、現在に至っては、ポジティブなカテゴリーが多く出現している。一部の事例について、介護初期から現在に至るまでの出現カテゴリーの変化を挙げると、事例 A:「悪夢」「希死念慮」→「自己成長」「克服」「喜び」「幸福」、事例 B:「不満」→「感謝」「生きがい」「友愛」、事例 C:「プレッシャー」「心配」→「安堵」、事例 D:「心身不一致」→「楽しみ」「感謝」、事例 E:「義務」「無理」→「冒険」「リフレッシュ」「前向き」「発見」、事例 F:「必死」→「切り替え」「発散」「満足」、などが挙げ

られた。

今回の対象であった、長期の介護経験をもつ介護家族では主観的ウェルビーイングの特徴として、介護負担や将来の展望についての楽観性や、「今ここ」での満足を見つけたり、夫の受障を最終的には自己成長の契機とみなす等、ポジティブな経験としての新たな意味を付与していた。本研究では介護者が、発症当初の混乱を経て、家族の障害や自己の生活変化を受容し、過去の苦難を改めて肯定的に意味づけし、将来に繋げようとする心性の獲得の様相が示された。

(2) 介護専門職におけるウェルビーイングの特性、それに関与する要因、通時的変化

①特別養護老人ホームあるいは介護老人保健施設に勤務する介護専門職を対象にしたインタビュー調査から得たナラティブに対してグラウンデッド・セオリー・アプローチを用い質的分析を行ったところ、主観的ウェルビーイングの認知的側面では、対象者のほぼ全員が共通して「人の役にたっているという認識」と「仕事(ケア)への不満」をもち、「離職願望」を強く抱く時期を通過した後で「仕事(ケア)への満足」「組織への満足」「職種への満足」が生じていた。主観的ウェルビーイングの感情的側面では、全員に共通して「(利用者やその家族から感謝・信頼される)喜び」等のポジティブ感情と「(仕事やケアについての)不安」や「抑うつ」等のネガティブ感情が認められた。

②通時的変化については、インタビュー対象者の全員が高齢者介護施設に就職後3年あるいは5年程の時期に、仕事の「やりがい感」を失い「離職願望」を強く抱いていた。対象者にほぼ共通していたのは、2年目まで「迷い」「混乱」「不安」を感じながらも「無我夢中」に「努力」した結果、3年目には仕事に「慣れ」たが、「単調」なルーチンワークに「物足りなさ」を感じたり、自己の「気の緩み」に起因するとみなされた(利用者の)転倒事故等で「自信喪失」「挫折感」を強くしていた。

こうしたネガティブな認知および感情を抱く時期を体験しながらも、その後、主観的ウェルビーイングを高め、生きがい感や充実感を回復していた。このことに影響を及ぼした要因は、対象者によってさまざまであったが、共通して語られたのは、「利用者の笑顔」「利用者・家族からの感謝・信頼」といった支援の対象者から介護職員に向けられる言動や、「チームワーク」「上司への相談」「職員の笑顔」等の職員間でのサポート、「研修参加」あるいは「実習生への指導」という自己研鑽や向学心を刺激し「プロ意識」を再認識させることがらであった。

上記より、入職当初は対人援助職としての

職務へのやりがい感が高い状態にあり、その後、やりがい感の喪失や離職願望といったネガティブな認知や感情を抱く時期を経て、利用者の示す笑顔をはじめとした感謝や信頼の表現、職員間でのサポート、職務についての自己研鑽、職務とプライベートとの切り離しによるセルフケア等によって、ウェルビーイングを回復するという通時的プロセスが示された。

③介護専門職の主観的ウェルビーイングの実態とそれに関与する要因を定量的に検討するため無記名式質問紙調査を行った。調査項目として、年齢、性別、介護関連資格、年収、雇用形態、勤続年数、夜勤の有無等の諸情報、および心理変数として、主観的幸福感、レジリエンス、個人志向性・社会志向性、バーンアウトをとりあげた。これらを客観性妥当性をもって測定し得る心理尺度を用いて質問紙を構成し、介護専門職の回答から得たデータを多角的に分析処理し検討した。対象者は、北海道内の高齢者介護施設20施設(特別養護老人ホーム12施設、介護老人保健施設8施設)に勤務する介護福祉専門職200名であった。回収数は159名(79.5%)であり、そのうち146名(73.0%)の有効回答が得られた。回答者は平均年齢33.6歳、介護福祉専門職としての経験年数は5年未満が42.5%、5年以上が57.5%であった。

勤務年数で比較すると、「利用者の役に立てたとき」「利用者の身体・精神状況が向上したとき」「利用者の家族から信頼されていると感じたとき」「職場内の人間関係やチームワークがよいとき」に介護福祉専門職としての「喜び」や「充実感」を感じる際の回答が、5年未満の対象者よりも、5年以上の対象者の方が有意に高い結果であった($p < .05$)。

仕事で困った時の対処方法では、「上司や先輩に相談」「同僚に相談」が経験年数の長短にかかわらず多かった。また仕事を辞めたいと思うときは「職場内の人間関係がよくないとき」が最も多く、リフレッシュ方法としては「仲のよい友人・知人と過ごす」が多いという結果であった。

以上の結果から、介護福祉専門職として利用者や家族とより良い関係性が構築でき、自ら実践するケアの有効性を実感することが仕事を継続していくうえで重要であることが示唆された。また、困った時に上司や仲間と相談することができる職場の組織風土は、同職種者同士の連携を高め、介護職として長く仕事を続けることに繋がる要因のひとつであることが示唆された。

心理変数についての統計分析では、主観的幸福感を目的変数、レジリエンス、個人志向性、社会志向性、バーンアウトを説明変数とした重回帰分析の結果、修正済重回帰係数が0.33で1%水準で有意、標準偏回帰係数がリ

ジリエンスのみ有意で ($\beta=0.24$, $p<.01$) 主観的幸福感とレジリエンスとの間に相互の影響関係があることが示された。本分析結果では、レジリエンス、個人志向性、社会志向性、バーンアウトのうち、主観的幸福感に有意に影響を及ぼしていたのは、レジリエンスのみという結果であったが、今後さらに上記の心理変数間の影響関係についての詳細な分析や、回答者の属性による分析等、より多面的な観点から、さらなる解析を行っていく。

(3) 同障者会、患者・家族会における参与観察および支援活動

①異なる2つ患者・家族会について、同障者およびその介護家族のピアサポート活動に継続的に参加し介入アプローチを行った。この実践研究の結果から、長年にわたる活動の経過の整理と成員に与える影響について検討した。本研究における患者会活動の効果や問題点について総合的に考察し、学会等で発表したところ、それに対して、介護家族および医療関係者から有益なフィードバックを得た。

本研究のフィールドとなった患者会は失語症、慢性痛、といった完治が困難なケースが多い疾患で、障害や痛みによる苦痛を同障者間でわかちあい、「今ここ」をポジティブに認知する心性の獲得、将来にむけての希望や勇気が同障者間のコミュニケーションを通じて得られることが示唆された。またそうした同障者間のピアサポートがスムーズに機能するためには、医療および臨床心理等の専門職が関与すること、さらに、家族が共に参加することが有効であることが示唆された。

②近隣地域に住む認知症等の介護家族、介護職のメンタルヘルス向上に取り組む企業、介護職に対するさまざまな講習等で指導および助言にあたった。本研究の成果をふまえて、介護家族対象の研修会や対人援助職対象の研修会等で、介護家族の心理的理解と支援、および対人援助職のメンタルヘルスの維持および向上にかかわる見解を述べた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ①本間真理、慢性疼痛集団精神療法—11年間のグループプロセスについて—、集団精神療法、査読有、27巻1号、2011、29-34
- ②風間雅江、介護家族における主観的ウェルビーイング—脳梗塞後右半身麻痺と失語症を呈した夫の介護にあたる妻の語りによる検討—、日本心理学会第75回大会発表論文集、査読無、2011、426

③本間真理、慢性痛グループ『くろぱんの会』で学んだこと、Practice of Pain Management、査読無、2巻4号、2011、16-19

④風間雅江、高齢者介護施設に勤務する介護職員の主観的ウェルビーイングに関する検討、北海道心理学研究、査読無、33号、2011、92

⑤風間雅江・本間美幸・八巻貴穂、高齢者介護施設に勤務する介護専門職の主観的ウェルビーイングについての質的研究、人間福祉研究、査読無、14号、2011、23-32

⑥風間雅江・本間美幸・八巻貴穂、介護専門職の主観的ウェルビーイングに関する質的研究—高齢者介護施設に勤務する介護専門職の語りを通しての検討—、日本心理学会第74回大会発表論文集、査読無、2010、268

[学会発表] (計7件)

①風間雅江、援助者のメンタルヘルスについて、北海道臨床心理士会2011年度第2回初任者研修会(招待講演)、2012年1月17日、札幌市北方圏学術情報センター「ポルト」

②本間真理・風間雅江・石合純夫、在宅失語症患者の社会参加ならびコミュニケーション能力向上—コミュニケーションパートナーがもたらす可能性—、第25回日本リハビリテーション医学会北海道地方会、2012年4月21日、札幌市札幌医科大学

③本間真理、患者会における心理的支援、2011年度臨床心理センター主催臨床心理学研究会(招待講演)、2011年12月20日、北海道江別市北翔大学

④風間雅江、介護家族における主観的ウェルビーイング—脳梗塞後右半身麻痺と失語症を呈した夫の介護にあたる妻の語りによる検討—、日本心理学会第75回大会、2011年9月17日、東京都日本大学

⑤風間雅江、高齢者介護施設に勤務する介護職員の主観的ウェルビーイングに関する検討、北海道心理学会第57回大会、2010年10月10日、札幌国際大学

⑥風間雅江・本間美幸・八巻貴穂、介護専門職の主観的ウェルビーイングに関する質的研究—高齢者介護施設に勤務する介護専門職の語りを通しての検討—、日本心理学会第74回大会、2010年9月22日、大阪大学豊中キャンパス

⑦風間雅江、介護家族の主観的ウェルビーイングについてのナラティブ・アプローチ—高次脳機能障害者の家族の語りを通して—、北海道心理学会第56回大会、2009年10月25日、名寄市立大学

[図書] (計1件)

①風間雅江、金剛出版、対人援助者の条件、

2011、50-87 (分担執筆)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

風間 雅江 (KAZAMA MASAE)

北翔大学・人間福祉学部・教授

研究者番号：60337095

(2) 研究分担者

本間 美幸 (HONMA MIYUKI)

北翔大学・人間福祉学部・准教授

研究者番号：30295943

八巻 貴穂 (YAMAKI TAKAHO)

北翔大学・人間福祉学部・講師

研究者番号：30364293

本間 真理 (HONMA MARI)

札幌医科大学・医学部・兼任助教

研究者番号：90423780